

農林業における獣害防止に向けた捕獲技術の実証研究

令和5～7年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

川島直通

三重県ではシカやイノシシといった大型哺乳類による農林業被害が長らく問題となっている。そのため、効率的な捕獲方法を明らかにし、各地で捕獲を推進していく必要がある。また、捕獲によって実際に生息密度がどの程度低減させることができるのか、もしくは低減した生息密度を維持するためにはどの程度の捕獲努力を続けていくべきかといったことを明らかにすることは、農林業被害の防止を進める上で重要であると考えられる。そこで本研究では、シカ等の農林業に被害を及ぼす獣の低コストで効果的な捕獲方法を検討するとともに、伊賀市子延地区において農地後背山林に自動撮影カメラを設置し、シカ生息密度推定を行い、捕獲の効果検証を行う。

1. 低コストで効果的な誘引餌の使用方法的検討

シカを特異的に誘引できる誘引餌としてヘイキューブがあるが、資材コストが比較的高く、捕獲者の負担となる。そこで、資材コストが低く手に入りやすいが腐敗しやすくシカ以外の動物を誘引してしまう米ぬかの効果的な使用方法を検討するとともに、長期間取り替え不要で労務コストが低いシカの嗜好性に地域差や季節差が大きい鉾塩の誘引効果の検証を行った。

通常の米ぬかと、米ぬかに海水塩を10%、20%、30%添加したものを誘引餌として用意し、7月～8月の期間に三重県伊賀市の山林内2カ所で誘引試験を実施した。自動撮影カメラにより、各餌の採食頻度を調査したところ、シカによる採食頻度は、餌交換直後は通常の米ぬかと海水塩10%添加した米ぬかで同程度であったが、餌交換後3日目以降は海水塩を10%添加した米ぬかで最も高かった。また、イノシシ、タヌキについては餌交換後の経過日数に関わらず通常の米ぬかの採食頻度が最も高かった。このことから、海水塩を添加することで腐敗防止によりシカ誘引効果の持続期間を延ばせる可能性があると考えられた。

鉾塩、米ぬか、海水塩10%添加米ぬか、ヘイキューブの4種を誘引餌として用意し、6～7月、8～9月、2～3月の期間に三重県伊賀市の山林内2カ所で誘引試験を実施したところ、いずれの期間も鉾塩の採食頻度が最も低かった。また、2～3月については鉾塩を採食したシカは全く確認されなかった。このことから、調査地に生息するシカの鉾塩に対する嗜好性は低く、特に冬季はシカを誘引する効果は低いと考えられた。

2. モデル地区におけるシカ出現頻度の経時変化と生息密度推定

三重県伊賀市に位置する子延地区を調査地として選定した。2017～2018年度に集中的な農林併行捕獲を実施したが、2019年度から捕獲圧を下げ、2020年度以降は林地での捕獲を休止した。2023年度には再び林地での捕獲を開始した。農地後背山林には16台の自動撮影カメラを設置し、シカ撮影頻度を調査した。その結果、捕獲圧の大きい期間である2017～2018年度はシカ撮影頻度が大幅に低下したが、捕獲圧を下げた2019年度以降はシカ撮影頻度が増加傾向にあることがわかった。林地での捕獲を再開した2023年度は撮影頻度が少し下がったものの、大幅な低下は見られなかった。

また、2023年度は自動撮影カメラによるシカ生息密度推定を実施した。調査範囲内の植生のパターン（常緑針葉樹林、落葉広葉樹林）を網羅するように、かつ調査範囲内で均等に分散するように設置し、RESTモデルを用いて子延地区のシカ生息密度を調査したところ、10-11月は27.3頭/km²、11-12月は16.2頭/km²であった。今後、調査地内で捕獲圧を高め、生息密度がどの程度低下するかを検証する。